

島根発

「ものづくり工場管理実践塾」で
生まれた新たなコミュニティ

島根県は中小企業の現場改善力向上に注力している。しまね産業振興財団は2009年から「ものづくり工場管理実践塾」を開講し、多数の受講者を輩出してきた。同塾は日本生産性本部の武川俊幸氏による整理・整頓の2Sを中心とした講義とワークショップの2部構成で行う。希望した企業には訪問指導も行っており、基礎知識と実践の双方で改善力を鍛える。参加費はすべて無料。中小企業が費用負担なく改善を学べる機会とあって、有効活用するリピーター企業も多い。

島根県には約23,000社の中小企業が存在する。それらの中小企業が大打撃を受けたのがリーマンショックだった。

「リーマンショックで稼働が落ち込んでいる時期、空いた時間を人材育成や現場改善へ有効活用してもらおうという目的でものづくり工場管理実践塾が始まりました」としまね産業振興財団経営支援課の松浦研二課長は開催の動機を語る。その後、参加企業が改善力を身につけ、ムダを改善すれば利益が出るという意識が浸透。実践塾は好評を得て、今もなお継続している。この機会学んだことが企業の競争力へと結びつきつつある。

まずは2Sの基本から、
改善レベルを上げる

9回目を迎えた今年度は、27社から65名が参加している。5月に開講し、7、9、1月の年4回活動する。改善の基本は整理・整頓の2Sというコンセプトから、基礎を徹底した内容とする。今年度のカリキュラムは、第1回は「改善デザインと2Sの徹底」、第2回は「メタボリックな工場か

ら脱却する」、第3回は「ストップウォッチ不要の改善」、第4回は「自社と他社の成果を相互確認する」というテーマで行われる。そして最終回は参加者の事例発表で締めくくる。

今年度は特にワークショップを重視したという。「昨年までは全員の前でチームの代表が発表する形式でしたが、発表の機会のない参加者もいたため、今年度はチーム制にすることで全員が発表するようにし、より交流の機会を増やしました」（しまね産業振興財団経営支援課の土井文人主事）と参加者の意見や感想を聞きながら、運営の工夫も重ねる。

A～Jのチームに分け、午前中は各チームで1人ひとりが改善実施プランや改善事例などを発表する（写真1）。チーム発表の最中には、コメントシートと気づきシートに感想やまねしたいと思えた改善事例を記入する。発表を終えるとチームメンバーが拍手で労い、熱心に質問したり、話し合う姿が見られた（写真2）。

午後は武川氏の講義が行われる。整頓の水準を上げるための工夫やツール、発注点管理や実棚卸などの管理方法といった、さらに2Sの知識を深掘りしていく内容である。

「この講義はストップウォッチを使わなくてもできる改善に主眼を置いています。まずはいるもの、いないものを分けることから始め、表示を強化し、徐々に整頓の水準を上げていきます。頭で知るだけではなく、経験を重ねて体感してから改善のレベルを上げていくことが必要なのです」と武川氏は話す。

写真1 宿題で作成してきたプレゼン資料をもとにメンバー全員が1人ずつ発表



写真2 1人ひとりの発表後には大きな拍手で労う



参加企業4社がグループ活動へ

実践塾は改善の基本を学ぶ場だけでなく、島根の中小企業同士が交流を深める場づくりともなっている。参加した企業同士が集まり、改善の自主活動を始めた動きがある。そば製造の(有)本田商店(雲南市)、精密機械加工を手がける丸高工業(株)(松江市)、(株)高橋産業(松江市)、(株)オービット(出雲市)の4社(写真3)。食品1社と比較的業種の近い機械加工の3社が集結した。

きっかけは、本田商店の白根尚子主任と丸高工業製造部製作一課の品川輝之氏が実践塾で出会ったことだった。2人とも第2期で学び、その3年後に再び参加。「なぜか品川さんとは縁があったんです」と白根主任がいうように、2回目に参加したときも同期として共に学んだ。また、品川氏も本田商店の本田繁社長と以前から親交があった。

そして、4社が顔を合わすきっかけとなったのが実践塾のアドバンスコースという企業訪問でのことだった。本田商店が視察現場となったとき、3社が参加。このとき意気投合し、のちのグループ活動へと発展していった。

基礎を学び、他社を見て己を知る

4社とも改善に目覚めた原点は、ものづくり工場管理実践塾だった。白根主任や品川氏のように過去に2回参加したケースもある。各社とも毎年

社員を参加させており、改善の登竜門という位置づけとしている。高橋産業の高橋佳子専務は現在、実践塾で学んでいる最中である。

「実践塾で講義を受けるようになって、改善はいかに基本に忠実にできるかが重要であることに気づかされました。基礎をわからずにオリジナルで進めようとしても、改善の進め方ややり方の本質を理解していなければうまくはいきません。整理・整頓の2Sは改善だけでなく、会社の運営や自分の業務の進め方などすべてに通じており、応用できるものだと実感しています」(高橋専務)と感想を語る。

高橋産業ではかつて、コンサルタントから指導を受けた経験もあり、工場を訪れた顧客から「きれいですね」と評価されたこともある。しかし、実践塾で学ぶと自社の改善には基礎が徹底されていないということに気づかされたという。

「改善をやっていくうちに、どうしても基本を忘れてしまうので、次の改善リーダーになりそうな社員に実践塾に参加してもらっています。そして、他社から情報を聞きながら成長していきたいと思っています」(高橋社長)とグループ活動に期待する。

改善の先進企業を見て刺激

4社の中で、特に強力なトップダウンで改善に取り組むのが本田商店である。白根主任は「私も初めは抵抗していました。それが実践塾で2Sの